

マトリックスから 実践を読む

三時眞貴子 (西洋教育史)

安藤和久 (教育方法学D1)

櫻井瀬里奈 (教育方法学M2)

三戸部由幸 (教育方法学M1)

吉田成章 (教育方法学)

大矢龍弥 (西洋教育史M3)

阿蘇眞早子 (教育方法学M1)

武島千明 (音楽教育学M1)

太田淳平 (西洋教育史M2)

金原遼 (教育方法学M1)

沖原さや香 (教育学系コースB2)

検討の方法

- ① 三グループに分かれて、それぞれで担当論文を決めて実践報告で書かれていた対応を空白のマトリックスに入れて、マトリックスを作成した
- ② グループ毎に、ここで見えてきた課題・疑問・気づきについて議論し、整理した
- ③ 作成したマトリックスを全体で共有し、課題・疑問・気づきについて検討した

EVRI版マトリックスからみた実践報告の特徴の一覧

	心身の健康と安全	カリキュラム	オンライン活用
超短期的視点	<ul style="list-style-type: none"> ②電話で家庭連絡、希望者と個人懇談 ②学年団からの手書きメッセージ ③子どもが自分で見いだすことができる目的への変換 ④・⑤子どもとの関係の構築とケア ⑧久々に顔を合わせ1つの内容を共に考える「場」 ⑩生徒を笑顔にするエクササイズ動画 ⑫電話も駆使した健康観察と出欠確認 ⑬「アナログ」な対応も必要？ 	<ul style="list-style-type: none"> ①・②EVRI 的「挑戦状」 ③指導計画作成員会で家庭学習の内容を吟味 ④・⑤カリキュラムの再編 ④・⑤・⑥・⑦学校での学習に向けた過程での学習 	<ul style="list-style-type: none"> ①学習プリントに動画の QR コードを掲載(例: NHK) ③「学習ソフト」や保護者－学校間連絡用アプリの導入 ④・⑥外部メディアの活用 ⑦所有メディアの活用 ⑧Zoom 職員会議、G Suite Classroom 活用開始 ⑨おすすめ書籍一覧の配信 ⑫同時双方向的な関係の構築 ⑭レポート課題通知(郵送)
短期的視点	<ul style="list-style-type: none"> ①教科通信で家庭学習への労いと仲間の存在の実感 ②子どもと向き合う時間の確保(一緒に遊ぶ) ④生徒観の構築 ⑤学習の遅れへの配慮と予防・対策 ⑦授業内での感染対策 ⑩教師同士のグループラインでの交流 ⑬生徒のメンタルヘルスケア ⑭学びの中での生徒同士のつながりを感じる場 	<ul style="list-style-type: none"> ①家庭学習も生かした単元に再構成(例: クイズ) ②総合や特別活動の内容を子どもとともに見直し ③校長会で教育課程再編成の基本方針を提案 ④・⑤・⑥家庭学習と授業の接続 ⑤・⑦休校に伴う授業数変更への対応 ⑦感染予防の観点からのカリキュラム再編 ⑨新たな学習内容の授業構成 ⑪探究の成果をどう把握し評価するのか ⑫身につけさせたい力の明確化 ⑭レポート課題→自己評価ルーブリックの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ①ネットワークやコンピュータになれる時間をつくる ③GIGA スクール構想等の前倒し(4ヶ月後を見通し) ⑨生徒の回答を活かす授業づくり ⑬タイムリーなオンライン授業評価 ⑭Google Classroom を活用したレポート課題
中長期的視点	<ul style="list-style-type: none"> ⑬多様な価値観による重層的支援体制 	<ul style="list-style-type: none"> ①家庭学習も生かした単元に再構成 ②特別活動の内、少人数でできることの吟味 ⑥・⑦新たな視点からの教材開発 ⑩「週末課題の解説動画」の作成 ⑪手ごたえの整理と課題のリストアップ ⑬組織的なカリキュラム・マネジメント ⑭密を避ける形態でのものに再編成 	<ul style="list-style-type: none"> ⑥コロナ禍の授業の発展的継続 ⑧ICT を活用した授業展開や実践共有の検討 ⑩自宅学習とオンライン教材の関係 ⑪資料の準備や指示をより丁寧に ⑪学級を超えたフィードバック ⑪授業時間に囚われない探究的学習

実践報告を受けての気づき

- 「つながり」、コミュニケーションの重要性

→つながりにくい状況だからこそあえて取り組む

1、人間関係

<行政―学校><教師―教師><教師―子ども><子ども―子ども><家庭―学校><外部―学校>、、、

③教育行政を中心にしたつながり

⑩英語科グループライン

⑧オンライン校内研修を用いた教員間連携

②④⑥⑨挑戦状の活用

2、カリキュラム

教科内容再編成、小学校―中学校の連続性

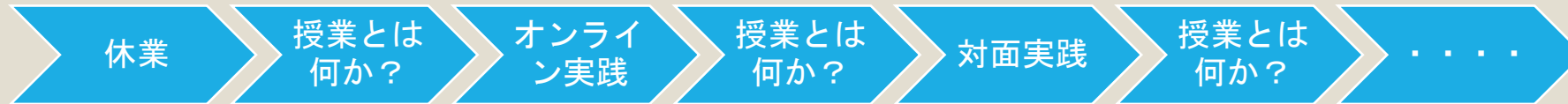
⑤反転授業の実践 ⑬教員の自由な教育観と、学校の理論的で組織的なカリキュラム・マネジメントとの調和

⇒教員同士が連動しつつ、学校教育全体を「見つめなおす」こと

見えてきた課題とこれから

- 「学校」とは何か、「教育」とは何か、「授業」とは何かの問い直し
⇒ 子どもにも、教師にも、研究者にも。

家庭学習が中心だった数か月を受けて、今、授業の在り方をもう一度考えなければならない



イマココ

- ・ 子どもたちとともにコロナに立ち向かう教師の姿 ②川崎実践：子どもと共にコロナに向き合う
- ・ 常に問い続けていく教師である重要性の再確認

子ども同士の挑戦状！

①野元実践(小学校社会科)

○学習プリント：復習ではなく，新単元の学習内容で作成する・・・授業進度をある程度保障する

❖これまでの家庭学習，宿題の在り方を見直す視点になるのではないか

↳復習だけの内容，ドリルやプリントによる繰り返し練習といったものだけでなく，自分で調べたり，考えたりする課題を出すことで，子どもたちの興味・関心やオリジナリティを保障できる

○社会科通信「みんなの学習広場」：家庭学習における児童の姿を取り上げる・・・家庭学習の取組を評価する。学級の仲間の存在を確認できる

❖「みんなも頑張ってるんだ」「〇〇くんは・・・って考えているんだ」「わたしももう少し頑張ってみようかな」などの次の学習への意欲付けにつながるのではないか

❖「はやくみんなに会いたいな」「みんなで〇〇したいな」など学級への思いを醸成できる取組である

○社会科通信「みんなの学習広場」：友達の応答を利用し，学習内容についてのクイズを子どもたち自身がつくり，それに応答し合う・・・クイズを解き合ったり，教師からのクイズに答えたりすることで，学習のねらいを達成する

❖社会科だけでなく，他教科でも「教科通信」は有効ではないか

❖子どもが学習内容にかかわるクイズをつくるだけでなく，社会科通信や学習プリントを作成する活動へと広げることで，子どもたちが自ら学習対象に向き合うようになるのではないか，さらに，自分の作成したプリントがみんなの学習に役立つことで，学習へのやりがいや自己有用感にもつながることが期待できるのではないか

○いずれの取組も，「短期的視点」に位置付いているが，「中・長期視点」での取り組みとして対応できうるものである

「特活」への着目と学年間・子ども間の「つながり」

②川崎実践(小学校特別活動)

- 学級活動において新型コロナウイルスに関する学習・・・手洗いやソーシャルディスタンスといったウイルスに関する知識を学ぶことができるとともに、そのことから生ずる差別や偏見といった社会問題についても考えることができる
- 学級活動の学習内容として「新型コロナウイルス」を取り上げることで、子どもたちの生活に根差した学習を展開することができるのではないか、それとともに他教科等への関連を図ることで授業時間数の調節もできるのではないか
 - ↳高学年であれば、報告書や意見文、新聞を書く素材にしたり、保健体育の内容との関連で理解を深めたり
- 保健委員会における「手洗いソング」・・・委員会活動（教科外活動）に位置付けることで、全校への普及を促進する
- 委員会活動が高学年の子どもたち自身の手で運営されていくものになっていくのではないかと
 - ↳「みんなのために役になっている」という感情をもつことは、委員会活動を充実させるためにも大切なことである。「新型コロナウイルス」（今現在の社会的事象）を取り扱うことで、その実感をよりもつことができる。
- 総合的な学習の時間「防災」のテーマとしての新型コロナウイルス
- これまでの「防災」の対象としては自然災害を取り上げることが多かったのではないかと考えるが、災害と言われるもののなかに「ウイルス」という目では捉えられないものも含まれるという視野の広がりや、災害の被害を考えると、「偏見、差別、メディアやSNSなどによる人的被害」といった視点をもつことにもつながる
- いずれの活動も、授業時数の確保が一番に考えられやすいなか、今の状況で子どもたちの学びを促すことは何か、また教師として今、学ばせたいことは何かをとらえ教科外の活動として位置付けている。そのことは、柔軟なカリキュラムづくりであり、社会と学校教育をつなげるカリキュラムの在り方の一つではないだろうか。

③福田実践(教育委員会)

- 「激動の時代」にあっても、そこにあるかけがえのないものを確かめたい
- 見え隠れする教師としての願いをどのように組織化するか
- 「新たな生活様式」の中で「協働的な学び」をいかに進めていくか

→(コロナに限らず)時代や生活様式が変化し続けるからこそ、教育の本質とは何かの問い直しを迫られ、「教育への願い」の変わらない部分に気付くのかもしれない。

↑②川崎実践「(子どもが)コロナ以前のような様子で安心」⑤伊神実践「できる条件の中で、「本当に生徒に身につけさせた力とは何か」」⑧⑭今中実践「もともと本校として教育したいこと(=「日彰館での学び」「田舎主義」)を、今の条件で行うだけ」⑬小澤実践「理想的な学校の在り方」等々にも通ずる部分があるのではないか。

- 町全小・中学校に学習ソフトを導入、保護者と学校が双方向で連絡できるアプリ導入、教頭・主幹教諭との「指導計画作成委員会」、教育課程再編成の基本方針を校長会で提案

→教育委員会は、子ども同士のみならず、各学校同士、保護者一学校間、教頭・主幹教諭同士、校長同士の関係づくりの基点になれる。(あくまで「事務局的な役割」以上の効果があったのではないか)

教科通信を介した探究的な学び

④青本実践(中学校社会科)

小学校から進学したばかりで学習の様子も家庭での環境の把握ができない

→課題を通じた子どもの現在地の把握とこれからの学習・授業の在り方の見通し

「探究的な学び」を家庭でも実現しようとする視点

→コロナ禍においてもポジティブに子どもの学びに向き合っている

←「探究的な学び」になるための条件 ⇔ 「作業的」にこなすだけの課題

① 生徒に伝わる導入の必要性 ② ある種の制約を設けること

EVRIの挑戦状の活用

→「探究的な学び」の実現のための外部メディアの利用

←子どもたちの課題をどう受け止めフィードバックするのかという教師の課題

学力の保障の意味での課題の提示と開かれた問いの提示

→「課題ではありません」と提示することによって、「挑戦状」への子どもの取り組みを後押し

→子どもにとって何が「探究的な学び」になるのかを再考。

←課題で手いっぱいの子どもの取り組みをどう促進するか？

「予習」と「つながり」への着目

⑤伊神実践(中学校理科)

授業に限らず学校教育活動全体の「見つめ直し」の視点

→今の状況下において、教育目標を実現するにはどうすればいいのかをもう一度考えること

↑⑧今中実践「もともと本校として教育したいことを、今の条件で行うだけ」

休校中の課題を活かした反転授業

→家庭学習を活かしながら、限られた時間内で子どもに学力を身につけさせる意図

←「予習ができていない子」「しんどい子」を排除しない授業、彼らがいなければならない授業

⇒「※つながり」の重要性

※<子どもー子ども><教師ー子ども><家庭ー学校><教師ー教師>.....

復習ではない「ジャンプ課題」の設定

⑥ 岩下実践(中学校社会科)

EVRI「挑戦状」の活用

→大学(教授) という存在を子どもの学びを刺激するものとして利用=学びのスイッチ

←外部を利用する部分(技術・環境)と教師・学校としてしなければならないことを区別(課題の評価など)する

←課題が返ってきたうえで、どう子どもたちにフィードバックしていくのかの問題

今後の実践の課題=「得られた情報から意見の形成につなげることができるのか」

↑足場掛けの意味で、書き方・取り組み方を教える=普段の授業で力をつけていく

↑「答えの出ない問い」を常に問い続けていく必要性

↑「難しくてできない・わからない」を許さない厳しさ ⇔ 子どもへのケアとサポート

⑦小林・高根実践(中学校音楽)

「新任」だからこそできる発想の自由さ

→経験に縛られない教材開発

→既存の教科内容に対する実践者からの問い直し ⇔ 教科としての教材の系統性・妥当性の検討

「歌唱やリコーダーの実技テストが実施できない場合の実技テスト代替案」

→①同じ題材の別観点での評価

→中長期的に捉えたとき、一つの内容の評価を多角的に行える可能性（ex.歌は苦手だけど、指揮は得意！）

→これまで教師が評価できなかった子を、授業の主役にできる可能性を秘めている

→②家でしかできない活動＝リコーダー・歌唱 をどのように評価していくのかという課題

オンラインでも校内研修を

⑧ 今中実践(高校校内研修)

◦Zoomウェブ会議を利用した校内研修（全3回）

→久々に顔を合わせ一つの内容を共に考える場の創出

→教員のICT活用能力の向上&各教科の授業計画の共有・学校教育目標の再確認

→教科の枠を超えた教師の連携&学校全体の方向性の明確化

◦Google Classroomによる他の教員のオンライン授業を参観できる体制

→教員間の情報共有や授業づくりにおける連携・相談しやすい関係性の創出

応答を意識したオンライン国語授業

⑨ 頼岡実践(高校国語 現代文)

数年前からタブレットの借入れ、ICTを活用した授業づくりに取り組んでいる；Classiを全校生徒が活用しており、生徒と教員が双方向的なやりとりを日常的に行っている

→既存の取り組みを活用し早期から生徒を支援

おすすめの書籍を一覧にして配信。実際に購入して読んだという生徒もいた。

→生徒とのコミュニケーションを生み出すきっかけとして有効だったのではないか

①生徒の学習支援のために入試対策を意識して動画を作成したが一方的な解説になった

②生徒同士の意見交流・発表が国語科授業の醍醐味であるから、EVRIの提案をきっかけに、生徒の解答を募集し紹介しながら解説する動画を工夫して作成

→受験のための学習支援という立ち位置から、科目・単元に応じた授業構成、教師の授業観に適う授業をオンライン上でも実現しようとする授業づくりへの意識変化

生徒に「やる！」と宣言して、人に聞いたり調べたりして、とにかくやってみる

→教師のモチベーションだけでなく、生徒の生活や学習を支えることにもなっているのではないか

→挑戦することによって、教師の周囲との関係が動き出し、つながりができていく

オンライン活用による教員の「つながり」

⑩橋本実践(高校外国語(英語))

LINEグループ「えみふる」での日々のコミュニケーションによって英語科の絆が深まった。
→断絶によってむしろ教師間の連携が強まっている。

生徒を笑顔にするエクササイズ動画を作成した。
→生徒の心身の健康を保つ。生徒からのフィードバックによって教師も元気づけられる。
→生徒からのフィードバックの重要性を再認識。

コロナ前から要望があった週末課題の解説動画を作成した。
→授業外の課題をフォローするためのオンライン配信がカリキュラム編成の可能性を新たに提起している。

①自宅学習と授業のつながり, ②自宅学習とオンライン教材のつながり, ③自宅学習だからこそやってほしいこと,
④学校だからこそできることや学校だからこそしなければいけないこと の整理をしていきたい。
→授業観・学習観・学校観の問い直し。

オンラインの特徴を活用した授業構成

⑪ 三浦実践(高校社会科)

TV会議システムの関係上、履修者全員を一度にオンライン授業をすることとなった。

→クラスの枠組みを超えたフィードバックや生徒間のつながりが容易に。

→既存の枠組みに捉われない関係の構築

(1) 各自で学習し、課題に回答 (2) 資料を提示し、資料から課題に回答 (3) 講義を聞いて課題に回答

→工夫することで探究的な学びが可能。

普通の授業では探究させる時間に制約があるが、自宅学習ではその制約がない。

→①時間に捉われない学習スタイル⇒生徒により深い探究を可能にする。

→②対面授業でできることの幅を広げる可能性をもつ。

教科担任を超えて授業を検討したり、回答を検討することが多くなった。

→教師間の関わりが生まれる。価値観の交流⇒評価の画一化を防ぐ。

オンライン授業だけでは、一人一人へのフィードバックがどうしても不十分なものになってしまった。

→見落とされる子どもがいないようにするためにはどうするか。

学習者目線のオンラインでの双方向性

⑫ 中山実践(高校外国語(英語))

Formで健康観察に回答していない生徒や朝の定時に出席の返答がない生徒に電話をし、回答の徹底を図った。

→オンライン主体での学校運営への「参加」の基盤を整える

校内共有フォルダのExcelシートにトラブル内容を入力し、分散勤務で連携が困難な状況の中でも確実に情報を共有した。

→教師協働と組織的なオンライン対応

5月18日(月)から29日(金)までの2週間、午前中9時からと11時からの1日計2コマの時間割に則り、全教科科目が開設した各科目のClassroomを活用してオンライン授業を行った。

→授業時間枠組みがないからこそ、1日の学びをどのように組織するのが問われている。

学校カリキュラムと教科の学びの連動性

⑬小澤実践(高校数学:探究的な学び)

「振り返りシート」はこれまで実施したどんな授業評価よりもリアルでタイムリーであった。

→オンラインを活用した応答関係と授業づくり

「重層的な支援体制」こそが、まさに今吉田高校に必要なのだと痛感する。それは、「多くの人が別々の価値観に従って支援をすることで、支援の輪の中に入ることができる生徒たちもいる」という発想である。

→教育・学校・授業観の問い直しからいかに中長期的なカリキュラム・マネジメントを創造できるか

「コロナ」をテーマとした学年間の「つながり」

⑭ 今中実践(高校総合)

◦ 総合的な探求の時間のレポート課題

→ 「日彰館の学び」を象徴する「田舎主義」継続させるという願い

◦ 他者のレポートを読む（考えの深まりを表現する&フィードバック）

→ 他者の意見を受け止め、応答するというコミュニケーション能力の成長

◦ 「例年行っている全校合同田舎主義と形態は違うが、内容はそれ以上になったかもしれない」

→ 例年：先輩から後輩への伝達（双方に学びはあるが、一方向）

今年：上記に加え、双方向でのフィードバックによるさらなる成長

マトリックスに当てはめたことで見えたもの 1

(1) 改めて見直すことは何か

→自分たちが学校をどのような存在だと考え、どのような教育を行いたいと考えているかの鏡（学校観、教育観、子ども観）

→これからの動きの流れを理解できるため、学校全体で課題を共有しながら、ブレずに動ける（今後へ活かす／第二波への備え）

→対策として抜けているところがわかる

学校観、教育観、子ども観

小澤実践（高等学校、数学）

自分自身の**理想的な学校のあり方**を再確認できた

伊神実践（中学校、理科）

今回の休校期間で得たものは、授業に限らず、学校生活全般に対して「見つめ直し」をすること。

「目的意識を持つ」ことの大切さを改めて教えてくれた。

「**本当に生徒に身につけさせたい力とは何か**」を現場の仲間と考え、協力しながら、チームとして生徒を支え、より良い教育につなげていきたい。

川崎実践（小学校、特別活動）

保護者との個人懇談が中止となったため家庭連絡を行った。電話を通じてだが、数名の子供達の声に触れ、どのように過ごしているのかを直接聞くことができ、嬉しく思った。

再開後に子どもたちが汗びっしょりになって遊ぶ姿を見て、**休校前と同じ姿に安心**すると同時に、コロナ対応がいつまで続くのか不安に感じた。

今中実践（高等学校：研修）

「**もともと本校として教育したいことを今の条件で行うだけ**」というシンプルな考え方に決着。

今後へ活かす／第二波への備え

野元実践（小学校：社会）

解除後の授業で、積極的にコンピューターを使わせて、操作を覚えられるようにした。

三浦実践（高等学校：社会）

オンライン授業を活用することで、対面授業でしか行えないことに時間をかけられるのではないかと感じた。

青木実践（中学校：社会）

普段の授業で探究的な学びを経験させることで、また休校になった際に、家庭で探究的な学習が展開できるようにしたいと思った。

中山実践（高等学校：外国語）

生徒に身につけさせたい力を明確にし、どのようなアクティビティを設定するかをより精査することが必要だと感じた。今回、改めて生徒の学びについて再考すると共に、**どんな状況下でも生徒に力をつける授業づくり**をしようと決心する機会となった

今中実践（高等学校、研修）

各教科のGoogle Classroomに全教員を招待することで、他の教員のオンライン授業を参観できる体制にした。今後も、このようにニーズに応える研修を柔軟に設定したい。

マトリックスに当てはめたことで見えたもの2

(2) こぼれ落ちるものは何か

- 行動計画が固定化される：**枠外の行動**が明文化されない。
また**枠同士の関係**も見えない
- **時間軸**をどう捉えるか（「始まり」「続いていくこと」）
- こちらが行うものを書き込む形なので、生徒と教師、保護者と教師等の**双方向の課題や対策**が織り込めない
- **実際の過程**が見えない
- **フェーズが変わる状況**をどう書き込むか
- **過去からのつながり**を書き込めない。現在から未来に向けてのマトリックスになっているので、これまでの取り組みとの関連性が見えてこない

過去とのつながりをどう可視化するか

今中実践（高等学校、総合）

例年、全学年合同の総合的な探究の時間を行なっていたが、コロナの影響で、「日彰館の学び」が止まってしまうことを危惧した。そこでこの状況でも可能な形でこれを行い、レポートの共有、他者のレポートへの感想を生徒にフィードバックした。

限られた環境下で生徒はコミュニケーションすることを楽しんでいただけたように思えた。

頼岡実践（高等学校、国語）

数年前から40台のタブレットを借り入れ、ICTを活用した授業づくりに取り組んでいる。また、2年前からベネッセのコミュニケーションアプリClassiを全校生徒が活用しており、連絡掲示板での配信や、課題の回収、学習記録のコメント欄への返信などで、生徒と教員の双方向のやりとりを日常的に行っている。しかし、国語科での授業でのICT活用はなかなか進んでいないのが実態だった。しかし今回、動画作成に積極的に取り組む他教科に刺激され、動画という形の学習支援を行った。

問：Research Question

コロナのパンデミックがなかったとしても、各学校が掲げる教育観は存在しており、コロナ禍でも、結局、その流れを受け継ぎながら、教育を展開するとするならば、現在すでに作られている行動計画とこのマトリックスによって示される新たな行動計画の関係はどのようなものと考えればいいのか？

単にコロナ対応としての安全対策のための変更だけではなく、今回の実践報告の中では、どのようなことに向けた取り組みがなされたのだろうか？

マトリックスに整理した実践を通して見えてきたこと

(1) コロナによる「封鎖、隔離、遮断」をどう乗り越えていくか

→空間も時間も共有できない状況をどう克服するか、あるいはどう活かすか

→制約がある中で、いかに越境するか、対話の場を作るか、開かれた空間を創出するか

グローバル化：移動、接触、越境、対話、交流の場→パンデミック後：封鎖、隔離、遮断へ

(刈谷×吉見対談 (2020年6月9日 集英社企画) / 『大学はもう死んでいる?』)

(2) 外部と遮断され、内部と外部の線が明確化 (国家、地域、家族、学校?、学年?、クラス?) される中で、どのように連携を行なっていくか

→制約を排除して内部の連携をはかり、絆を強めていく

→学校外の教材や人材といった外部との連携に可能性を見出す

→同一性の確保が難しい中で、排除せずに包摂するためにはどうしていくかを考える

=グローバルとナショナリズム：共存のあり方、「我々」とは誰かを改めて考えること

すなわち、実践報告で見えてきたのは・・・

封鎖、隔離、遮断が行われる状況の中で、制約を打破しつつ、越境や対話、開く、包摂、連携を促す取り組みに組み替えていくことであった

事例 1

- (1) 会えないからこそ、生徒とのつながりを保とうとした(4) →内部の連携
- (2) いかに課題を活かした授業を行なっていくかを教科担当で話し合った(5) →内部の連携
- (3) 教師一人一人の「授業観」を互いに認識でき、教科内で授業についてこれまで以上に議論できた(13) →内部の連携、対話
- (4) この休校中のグループラインでのやりとりで教科担当全員の絆は石のように固いものとなった(10) →内部の連携、対話
- (5) 分散勤務の中、ウェブ会議を行い、久々に顔を合わせる教員もいる中で、一つの内容を共に考える「場」を作ったことも意義があった。他の教員と情報共有や協力をしながら進めることができた(8) →内部の連携、開く
- (6) 1週間で各学年全生徒への電話連絡の実施。結果、健康観察回答率は90%以上となり、家庭のICT環境や機種等により生じるトラブルを電話対応した教員が聞き取り、分散勤務で連携が困難な中でも情報を共有化した(12) →内部の連携、空間の制約の打破

事例 2

(7) 自宅学習は、授業時間という制約を緩和する(11)→時間を共有できないことを活かす

(8) 個々の子どもたちの学習の差（知識や技能等）をいかに活かし、引き上げていくか
(1)、個々の学力の差を念頭に置き、「自力で取り組める程度の課題に止める」ことを共通課題にした(5)→開く、排除ではなく包摂

(9) クラスを超えた授業展開や教科担任を超えて授業や生徒の回答を検討できたし、クラスを超えてフィードバックができた(11)→越境、開く

(10) 生徒が課題に意欲的に取り組んだ理由として、「少しハードルが高い、開かれた問い」「学校外部の専門家からだされた課題」「学校外部の専門家からのフィードバック」の三つが大きかった(6)→開く、越境、外部との連携

(11) 教育委員会主導で町内の小学校の教頭・主幹教諭が委員会を構成し、知恵と経験をもとに、学校ごとではない家庭学習課題の作成や年間指導計画の策定を行なった(3)→外部との連携による外部の内部化（「我々」の組み替え）

おわりに

マトリックスに当てはめて考えることで、改めて見直すもの、隠れてしまうものが整理された。

→マトリックスを使う際には、これらの点への意識が大事。

一方で、マトリックスは行動計画の策定をし直すことを意味する。単に安全対策といった対処療法的な見直しではなく、何らかの教育学的意図を持って変更することで、これまでの教育を引き継ぎながらも、新しい教育のあり方を積極的に模索していけないのではないか。